



踊りつつ抜ける頃合ひ目で知らず 務中昌己



◆ 娯楽のなかった時代の滋賀県では、盆踊りは若者には絶好の恋愛のチャンスであり、出会の場でした。自分の村や町だけでなく、近隣の盆踊りにも、暗い夜道を男女語りながら浴衣姿でおもむいたものです。

◆ 子供たちは無邪気にはしゃぎ、大人たちも帰省した家族とともに、さまざまな思いを胸に踊ります。老人たちもまた、孫たちの前で軽快に踊ります。

◆ 深夜まで聞こえる江州音頭のあの掛け声

♪ そらーよいとよーいやまかどっこいさーのせ

人との出会いや別れとともに、過ぎ行く夏を惜しむ風情ある行事です。



近江恋々 (3)

久田 二郎 (歌誌「寸信」主宰・永源寺出身)

私の一家は昭和二年(小学二年)に滋賀県の片田舎から東京へ移住した。十七年に日中戦争に狩り出され、敗戦後二十一年に帰国、二十二年以後、私だけ沼津住まいである。折りに触れ滋賀県の幼少当時は思い出される。

獅子舞い 正月の子供の楽しみは獅子舞いである。それは十日頃であったと思う。道具類の入った大きな物入れ(長持ち)を担いで、七、八人が組を成してやって来る。村の二、三の資産家が、この興業を買うのである。我が家もその一軒。その家の庭前で行われる。観音開きの門が開けられて、一般の人も見物に来る。資産家の権威の誇示でもあったのだらう。その家では、朝早くから雪を掻いたり、接待の餅を搗いたりする。資産家の家には用人の男衆(おとこし)と女衆(おなごし)が居た。獅子舞いの一行に女性が居たかどうか記憶にない。中に女装をした男性の役者が居た。ボケ役の老人が笑わせた。芸(だし物)は、四、五本のバチを高く放り上げて受けたり、三人が肩に乗ったり、笛で踊る角兵衛獅子や三味線の越後獅子を聞かせたりした。一番の出し物は、四、五人が女装をした「オヤマの道中」である。冬景色の中で見る色鮮やかな衣装に目を奪われた。この獅子舞いのグループの名を「加藤菊太」と覚えている。今年の初め頃、NHKテレビで犬上郡豊郷の加藤一座の年間の事を詳しく報じた。懐かしかった。

愛知川 えち川と読む。まさに清流であった。鮎釣りに又上流の紅葉期の舟遊びで知られる。

我が家から歩いて三十分ほど。八日市から永源寺町に通じる八風街道に沿っている。叔父(父の弟)に連れられて鯉を捕りに行ったことが忘れられない。長い柄の網(タモ)は細い糸のような網目である。これを川の淵のウロに沈めて、上手から長い竿でウロを突いて鯉を追い出す。タモに入ると急激な手応え。さっと上げるとタモが揺れている。鯉が獲れたのだ。清流の魚だから鱗が整って綺麗だ。この鯉を食べたのかどうか記憶にない。河原で食べた弁当が美味しかった。叔父の三角の蕙帽子が記憶に残る。(次号へつづく)

「二〇年ホームがアウエーのわが人生」 これは、今年の第一生命のサラリーマン川柳の番外編に載っていた句で、作者の意図とは別にして、何か心に残っている。

現在、浜松に移って一一年、平居会長の要請と尽力により平成一七年静岡滋賀県人会遠州支部がスタートし、支部長の大役を拝命することとなった。耳順を過ぎた今振り返ってみると、約三分の一の二〇年弱を近江の安土で過ごしているが、過半年がアウエー(?)か、或は逆か。

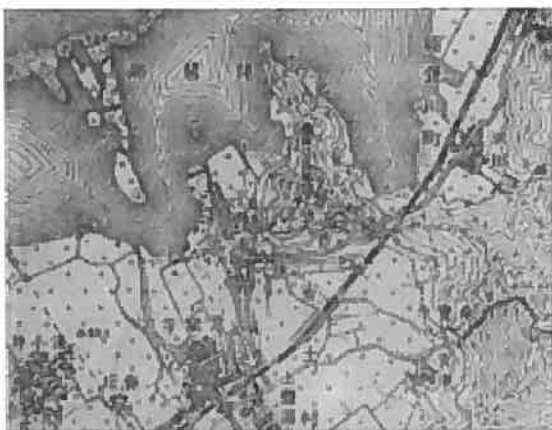
五月末、安土小学校の同窓会があり、久しぶりに安土山(城址)を歩いた。その折、近江八幡との合併の話題があり、拙稿が目に触れる頃は「安土」は無くなっているかも知れない。ちよつと寂しいかな。

幼年時代の安土村(現安土町)は、長閑な田園風景に囲まれて、四、五歳の頃に引越すまで、東海道本線の安土駅の近くの鉄道レールの隣(正確にはレールから2軒目でその間に安土郵便局があった)に住んでいた。

移った先は歩いても数分で、安土山に近づいた。当時、安土山は知っていたが「城山」の意味がわからず、城跡巡りの人から「しろやまへの道?」を尋ねられ、やっつことことで「あづち山」を教えることができたことを覚えていて。安土城は、何回かの発掘調査や、名工大

内藤教授らの、金沢で見つかった「天守指図」の解析から四〇〇年余の昔が再現されつつあるが、当時小学校に安土城の模型(下右写真)があり、残っていたらいいなと思ひ、何度となく遊びまわっていた。家に有った金箔の残っている瓦のかけら(現在所在不明)を得意げに見せたり、また、物置の二階で見つけた明治時代の地図(下左写真)でも、三方(今は干拓)が琵琶湖に囲まれていて、織田信長ファンに自然になっていたと思われる。

四〇年前にも訪れた浜松、二俣、掛川、駿府などは、天守が復興されたり、昔のままであったり、時の流れの機微に驚かされます。しゃくなげ会の静岡を初め、海外を含めた県人会の方々に、僅かでも近江の香が匂えばと、機会を見つけ古い記憶を辿りたいと思います。





平成十一年五月一日に第二の本四連絡橋「しまなみ海道」が開通すると、もうその翌日五月二日、京都よりバスツアーで二泊三日の旅に出ました。しかし当時は完全な自動車道ではなく、島と島を橋で繋げただけの状態なので、渋滞に継ぐ渋滞で、目指す道後温泉に到着したのは翌日の御前二時。温泉に入ることもできず、コンビニのおにぎりで食事したのを覚えています。

今回七十三歳になる記念に、あらためて道後温泉につかり、金刀比羅の階段に挑戦したいと思い、四月十八日から五日間、一八〇〇キロの道のりを完走する目標を実行に移しました。京都の妹夫婦の家を歩き帰りの宿泊場所として、二夫婦四人で二泊三日の日程で朝早く出発しました。天気は快晴、道路状態も良くて順調にしまなみ海道に入る事が出来、お昼には今治のタオル美術館に居ました。市内を散策したかったので、十四時過ぎに松山のホテルに入り、坊ちゃん電車で松山城を見たり、坊ちゃん広場で太鼓ショーを見学したりして一日目が終わりました。

二日目はいよいよ金刀比羅さんの階段に挑戦です。十時過ぎに琴平に到着して竹杖を借り、約八百段の階段を周りのお店を見ながら登っていき、最後の急な階段も無事に進んで本宮に着くことができました。下りは早く、上りの半分の時間で済んで、七十歳台の四人が無事金刀比羅参りができ、嬉しい限りです。その日は高松に入って栗林公園などを散策し、早めにホテル入りしました。そして翌日は屋島見物の後、神戸淡路鳴門自動車道を走り、京都には十七時頃には到着することが出来ました。残念だったのは濃霧のため、鳴門の渦潮を見られなかったことだけでした。

最終日は滋賀の両親の墓参りをして、その他の用事も済ませ、新名神、伊勢湾岸、東名の各高速道路をひたすら走り、十八時ころ帰宅しました。そして翌二十三日、無事、七十三歳の誕生日を迎えることが出来たのです。

（次号へ続きます）



近江の名句 ③

三上八郎（五個荘出身）

ふなずし
鮒鮓や彦根の城に雲かかる 与謝蕪村

江戸中期の俳人蕪村のこの句には、詩人萩原朔太郎の評釈がある。「夏草の茂る野道の向うに、遠く彦根の城をながめ、鮒鮓のビジョンを浮かべたのである。鮒鮓の連想から、心の雲と対照して、不思議に寂しい旅愁を感じさせるところに、この句の秀れた技巧を見るべきである」としている。鮓は俳句では夏の季語。「なれずし」は夏の保存食だから。光秀が出した鮒鮓に信長が「客に腐った魚を食わすのか」と激怒したという昔から、鮒鮓をめぐる笑い話には事かかない。

滋賀の味③ 「丁字麩」



近江名産・丁字麩の老舗、近江八幡の「麩惣」の「ふ」が、九月例会のお土産です。丁字麩は、すき焼き、卵とじ、酢の物、その他、その用途は多様ですが、なんといいっても「からし酢みそ和え」が絶品でしょう。今回の品は、それらの材料がすべてセットになっているようで、ご自宅で便利に調理していただけます。

創業・嘉永年間 麩惣 近江八幡市博労町元二三番地 0748-32-2636



湖国奇談 Ⅲ

「お多賀じゃくし」



おたまじゃくし（蛙の子）の語源は「お玉杓子」、そのまた語源は「お多賀じゃくし」だという。その「お多賀じゃくし」は滋賀一の社、多賀大社の参拝土産である。多賀大社の何たるかを知らない人が、ではその杓子ができる前には、蛙の子は何と呼んでいたのかと問い詰めた。しかし、お多賀さんの記録は、和銅五年の古事記にすでに見え、「お多賀じゃくし」の方も、養老年間（七一七〜七二四年）に天正天皇の病氣平癒に効き目があったのが由来だと聞かされ、黙ってしまったという話である。

江州弁（方言は国の手形）

「ほやなあ」

小西 伸武（エッセイスト・千葉市在住・近江八幡出身）

ほやなあといつも相手に頷いて話してみたりむすめのわれは 北神 照美

わが郷里の方言である「ほやなあ」をキーワードにした短歌が、〇八年十二月十日付朝日新聞千葉版「歌壇」の第一席に選ばれていた。作者については、選者の藤田武が選評の中で、「作者は、近江八幡の出身、近江の方言のなかで育ってきた。故郷の地を離れても、その言葉は作者を包み込んでいたのであろう」と紹介していた。

いい歌だ。それに、「千葉版」で「ほやなあ」にお目にかかれるとは、なんとも嬉しかった。作者の紹介は、自分のことを言われているような気がした。

「ほやなあ」は「そうだなあ」の意味である。作者は「ほやなあ」のやわらかい語感と、方言の持つ独特のニュアンスを巧みに生かして、遠い昔のむすめのころの心情を懐かしんで詠んでいる。そのころの作者は、青春のまったただ中にいて、将来に、希望と、それを上回るほど大きな怯えを抱いていたのであろう。その怯えが、いつも「ほやなあ」と頷かせていたのではないだろうか。この歌は「いつも」という言葉が効いている。「むすめのわれ」

ゆえに「いつも」——青春とは、そういうオドオドしたものなのだ。
ほんまに、僕もほやったなあ。しみじみとそう思う。

高校生から大学生にかけての時期、私も大きな怯えを抱えていた。踏み込もうとする世の中がさっぱりわからない。どちらの道に進めばよいか。生きるってどんなことなのか。不安でたまらず、いつも相手に頼いて、何かを頼りにしようとしていた。親は技術者になれ、手に職を持ってば食いはぐれはない、としつこく薦めた。物理も化学も苦手なのに、私は「ほやなあ」と頷いていた。友人がえらく大人に見えた。言うことがいちいちもつとも思えた。小説に宗教書に映画に、何か得ることはないかと必死に立ち向かった。

そのころから五十年余が過ぎた。次第に「いつも」ではなくなつたが、頷きながら手探りで生きてきた。そして、年令に応じたそれなりの人生観を得た。この人生観をあのところにて得ていたら、と考えてみることもある。すると、私の人生はさぞかしつまらなかつたらう、という答えになる。人生は未知だから生きていける。未知は恐れを呼ぶが、わからないがゆえの希望と、切り開いていこうとするエネルギーを与えてくれる。それがないとすれば、人は生きていけないだろう。

死ぬまで、「ほやなあ」と呟くことがあるように願っている。

(〇九・一・一三)

いちどは行きたい滋賀県の文化施設

1

近江日野商人館



当会会員・山中利之さんの元ご本宅が、近江商人記念館となっている。

この建物を町に寄付された山中兵右衛門家は、静岡県御殿場を拠点に造り酒屋を営むなど、日野商人の代表格であるが、その母屋、庭園、土蔵は典型的な近江商人屋敷の特徴を持ち、館内には初期の行商品、道中具、家訓などが展示され来館者の興味を誘う。

最近も同館職員が蔵内部を整理していて、古い木箱の中から古代石薬を見つけたが、正倉院に保管されている品と同種の貴重な物らしく、当時の日野商人の実力を示す資料として、いよいよ注目が集まっている。

☆滋賀県蒲生郡日野町大窪仕出町一〇一一

☆近江鉄道日野駅下車・バス一〇分「大窪」、または

JR琵琶湖線近江八幡駅下車・バス五〇分「大窪」

☆名神高速道八日市ICより国道四二一・三〇七号で二〇分・駐車場一〇台

☆お問い合わせ 0748-52-0007 月曜・金曜・年末年始休館 料金三〇〇円

この会報を長く続けたいと思います。原稿は左記へお寄せください。
会報をお望みの方は返信用封筒を同封し、左記へお申越しく下さい。

(発行所) 〒410-0874 沼津市松長九二一―六一―一〇〇三 三上 八郎